

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	太田 満
2. 審査委員	主査：（兵庫教育大学教授） 原田智仁 副主査：（鳴門教育大学教授） 梅津正美 委員：（上越教育大学教授） 茨木智志 委員：（兵庫教育大学教授） 森田 猛 委員：（兵庫教育大学教授） 米田 豊
3. 論文題目	小学校における多文化的歴史教育の理論と授業開発
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻社会系教育連合講座 太田満 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成29年 2月14日（火）15時00分～15時50分 場所：兵庫教育大学 教育・言語・社会棟7階 706室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>本研究の目的は国内外の多文化的歴史教育研究とその実践，とりわけJ・A・バンクスの多文化教育の理論を手がかりに，多文化的歴史教育の理論構築とそれに基づく授業開発を行うことである。多文化的歴史教育とはバンクスの多文化教育の理論によってつくられた歴史カリキュラムと，その理論に基づいて開発された歴史授業を指す。バンクスの理論とは，多文化教育の理念に基づくカリキュラム改革の四つの方法のことであり，貢献アプローチ，付加アプローチ，変換アプローチ，社会的行動アプローチからなる。本研究では，変換アプローチ（カリキュラムの原理やパラダイム，そして基本的な前提を変え，生徒が異なった視点から概念や論点，テーマ，問題を考察することを可能にする方法）と，社会的行動アプローチ（変換アプローチをさらに発展させ，意思決定を通して社会問題を解決するのに必要な能力を身につけさせる方法）に着目する。社会がグローバル化し，教室が多国籍化・多民族化する中，多様性が尊重され公正で平等な民主主義社会—多文化共生社会—を築くためには，変換アプローチや社会的行動アプローチに基づく歴史教育が必要と考えて本研究に取り組んだ。</p> <p>本論文の構成は以下の通りである。第一部では多文化的歴史教育の理論を論じる。</p> <p>第1章 多文化的歴史教育の基本原則</p> <p>ここでは多文化的歴史教育の基本原則を，目標，内容，方法，評価の四つの観点から考察する。</p>

第2章 多文化的歴史教育の授業構成のための実践分析Ⅰ

ここでは第3学年の総合単元「多文化社会に生きるわたしたち」を事例に、多文化的歴史教育の理論構築のための実践分析を行い、課題を明らかにする。

第3章 多文化的歴史教育の授業構成のための実践分析Ⅱ

ここでは第6学年の歴史単元「東アジアにおける古代国家ヤマトと渡来人」を事例に、多文化的歴史教育の理論構築のための実践分析を踏まえて、課題克服のための理論構築の原理を提示する。

第4章 多文化的歴史教育の授業構成のための実践分析Ⅲ

ここではアイヌ史学習の実践を事例に、小学校社会科カリキュラム上のアイヌ史学習の位置付けと課題について論じる。

第5章 実践分析を踏まえた多文化的歴史教育の授業構成

ここでは第2章～第4章の実践分析を踏まえ、変換アプローチおよび社会的行動アプローチの授業構成の原理を提示する。いわば本研究の理論仮説の中核をなす部分である。

続いて第二部では、第一部第5章の理論仮説に基づく多文化的歴史教育の授業開発を、単元設定の理由、内容構成、授業過程の組織化、授業計画という四つの側面から説明する。

第6章 小学校社会科歴史単元のカリキュラム構成

ここでは、先行研究の批判的分析を踏まえ、小学校社会科における多文化的歴史カリキュラムの全体像（試案）を提示する。

第7章 変換アプローチに基づく歴史授業モデルⅠ

ここでは、変換アプローチに基づく歴史授業モデル事例として、中学年歴史単元「神戸南京町の年中行事と歴史」を開発し提示する。

第8章 変換アプローチに基づく歴史授業モデルⅡ

ここでは、変換アプローチに基づく歴史授業モデル事例として、第6学年の歴史単元「散文説話から考えるアイヌ史」を開発し提示する。

第9章 社会的行動アプローチに基づく歴史授業モデル

ここでは、社会的行動アプローチに基づく歴史授業モデル事例として、中学年の歴史単元「昔の道具から考える男女平等」を開発し提示する。

終章

本研究の主たる成果は、以下の三点にまとめることができる。第一に、多文化的歴史教育の目標・内容・方法・評価の基本原則を明らかにしたことである。多文化的歴史教育が目指すのは、多文化的資質・能力の育成であるという仮説のもと、その下位項目を「自尊心と他者への共感」、「多様性の理解」、「構築主義的な見方への転換」、「不平等社会の可視化」、「多文化共生社会を創る上での価値の検討」とした。そしてそのような多文化的資質・能力が育成されるための内容、方法、評価の諸原則を示し、多文化的歴史教育の土台を明らかにしたことが第一の成果である。

第二に、小学校社会科における多文化的歴史教育のカリキュラム（試案）を示したことである。先行研究の課題を洗い出すプロセスで、多文化的歴史カリキュラムの開発には、①学習指導要領が示す内容との関連性、②中学年の歴史単元を視野にいれたカリキュラム、③多様な属性（マイノリティ）についての追究、④時間数と学習課題の明記の視点が必要であることを見出した。その上で小学校社会科における多文化的歴史カリキュラム試案を示した。本試案は太田氏の現勤務校の状況に合わせて作成したという点で、全国のどの小学校でも通用するものではないが、(1)多文化共生に関連する内容を（教科書の）各単元の中から探す、(2)多文化カリキュラムのキー概念をおき取り上げる属性を考える、(3)単元の配列を考える、(4)主な問いと事例を考える、といったカリキュラムの作成手順については汎用性をもっている。こうした多文化的歴史教育カリキュラムの開発方法を提議

したことが第二の成果である。

第三に、変換アプローチに基づく授業構成の原理を明らかにしたことである。これまで変換アプローチは、カリキュラムレベルで論じられるか、特設単元の開発という形で提案されるかのどちらかであり、実践的検証が十分になされていないという課題を有していた。本研究では実践のフィルターにかけ、課題とその克服方法を明らかにする作業を通して、変換アプローチに至る授業過程の仮説を見出した。バンクスの理論を援用し修正した形での変換アプローチに基づく授業構成を明らかにしたことの意義は二つある。一つは、その先にある社会的行動アプローチの授業構成を考える道筋を得たことである。二つは、日本でも実現可能な多文化的歴史教育の形を示したことである。学習指導要領によって内容が定められ、年間学習計画（カリキュラム）を自由に変えることのできない学校事情がある中で、カリキュラム改革によって多文化的歴史教育を実現していくことは容易ではない。まずは単元レベルで多文化的歴史教育の授業を開発し、実践していくことの方が現実的であり、その積み重ねがカリキュラム改革につながると考える。

2. 審査経過

本研究は小学校社会科歴史教育の改革のための実験実証的な研究をめざしている。まず、改革のための学習理論の枠組みとしてJ. バンクスの多文化教育論に着目し、それを歴史カリキュラム論として具現化するために授業開発と実践分析を繰り返して授業構成仮説を導き出し、最終的に小学校社会科の多文化的歴史カリキュラム試案を提示するに至った。併せて、変換アプローチに基づく二つの歴史授業モデルと社会的行動アプローチに基づく一つの歴史授業モデルを成案として示した。それらの点で、極めて挑戦的で独創性の高い研究であると評価された。

また、現職の教員としての立場を生かして、自らの理論仮説を授業の開発と実践分析を通して検証するという実証性についても、教科教育実践学の研究に相応しいとして、高く評価された。

部分的には理論と実践の間に若干の飛躍等の課題が指摘されたが、それも開発した授業モデルの実践・検証を通して、理論そのものの妥当性を吟味することにより解消可能であり、そうした継続的な研究を通じて更に本研究が発展性を持つことになるという将来性も評価された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 太田満 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。